



TITLE:

血清D-fetoprotein値の上昇を伴った腎癌の1例

AUTHOR(S):

西村, 泰司; 原, 眞; 阿部, 裕行; 金森, 幸男; 奥村, 哲;
吉田, 和弘; 秋元, 成太; 川村, 直樹; 八束, 満雄

CITATION:

西村, 泰司 ...[et al]. 血清D-fetoprotein値の上昇を伴った腎癌の1例. 泌尿器科紀要 1984, 30(7): 903-905

ISSUE DATE:

1984-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/118229>

RIGHT:

血清 α -fetoprotein 値の上昇を伴った腎癌の1例

日本医科大学泌尿器科学教室（主任：秋元成太教授）

西村 泰司・原 眞・阿部 裕行・金森 幸男

奥村 哲・吉田 和弘・秋元 成太

国立東静岡病院泌尿器科

川 村 直 樹

国立東静岡病院整形外科

八 束 満 雄

A CASE OF RENAL CARCINOMA WITH BONE
METASTASIS, PRODUCING ALPHA-FETOPROTEINTaiji NISHIMURA, Makoto HARA, Hiroyuki ABE, Sachio KANAMORI,
Satoshi OKUMURA, Kazuhiro YOSHIDA and Masao AKIMOTO*From the Department of Urology, Nippon Medical School**(Director: Prof. M. Akimoto)*

Naoki KAWAMURA

From the Department of Urology, Tohsei National Hospital

Mitsuo YATSUZUKA

From the Department of Orthopedics, Tohsei National Hospital

A 54-year-old man was admitted with the complaint of severe lumbago, pain in the right shoulder and difficulty in walking. Laboratory tests showed markedly increased α -fetoprotein (AFP) level (600 ng/ml) and tomography demonstrated osteolytic lesion of the 5th lumbar vertebra and right scapula. Needle biopsy of the 5th lumbar vertebra revealed only necrotic tissue pathologically. Liver scan and whole body CT did not show any abnormality except for a right renal mass. Hypervascular tumor at the lower pole of the right kidney was noted by IVP and selective renal angiography. No pulmonary metastasis was found. The patient underwent transabdominal right nephrectomy. He had a lowered level of AFP (300 ng/ml) on the 17th post operative day. AFP level dropped further to 100 ng/ml after administration of vinblastine and ifosfamide. Lumbago continued without improving, and the patient died at home 20 weeks after surgery due to general weakness.

Although we did not perform radiological examination of gastro-intestinal tract or autopsy, we concluded that renal cancer and/or a metastatic lesion to bone produced AFP because of the following reasons. 1) No other tumor was detected by liver scan, whole body CT, laboratory examinations, operation or clinical symptoms. 2) The AFP level was lowered after nephrectomy, and further dropped with chemotherapy. 3) A case of renal cancer with bone metastasis and without liver metastasis, producing AFP was reported in the Japanese literature in 1983.

Key words: Renal carcinoma, Bone metastasis, Alphafetoprotein

緒 言

原発性肝癌や胎児性癌の免疫学的診断法として知られる血清中の α -fetoprotein (以下 AFP と略す) は、現在泌尿器科領域では睾丸腫瘍のマーカーとして広く用いられているが、最近腎癌においても AFP 陽性症例が報告された¹⁾ われわれも臨床経過から血清 AFP 値の上昇が腎癌によると思われる症例を経験したので報告する。

症 例

患者：54歳、男性

主訴：腰痛、右肩部痛

初診：1983年3月3日

家族歴：特記すべきことなし

既往歴：高血圧、脳血栓 (50歳)

現病歴：1年前より腰痛、また4カ月前より右肩部痛があり、腰痛が徐々に増強し歩行困難となったため1983年1月22日国立東静岡病院整形外科を受診し、ただちに入院となる。レントゲン撮影にて第5腰椎および右肩甲骨の融解像を認め (Fig. 1)、骨スキャンにて第5腰椎の中央やや左側に low uptake を示し縦走する帯状影を認めた。同部の針生検の結果は壊死性骨組織であった。血清 AFP 値が 600 ng/ml と高値であったため、まず肝癌の骨転移を疑って肝スキャンおよび腹部の CT を施行した。肝スキャンは正常で、CT にも肝臓、脾臓などの腹腔臓器に異常を認めなかったが、右肩の下極に mass 像を認め、IVP および右腎動脈造影 (Fig. 2) にても同部の腎腫瘍が疑われた。この時点で肺転移は認められず、腎摘出術を目的とし3月5日泌尿器科に転科した。

入院時現症：身長 152 cm、体重 49 kg、栄養中等なるも、歩行不能で右肩甲骨下角部および左仙腸関節部に圧痛を認める以外は特記すべき身体所見はなかった。

入院時検査所見・血液生化学所見・白血球 12,800/mm³、AL-P 151 mu/l、AFP 600 ng/ml、血清免疫電気泳動で α_1 -Antitrypsin および Haptoglobin の軽度増加、血沈 54 mm/h 以外は肝機能、CEA も含め正常値であった。

経過：3月7日経腹膜的に右腎摘出術を施行した。術中腹腔臓器にとくに異常を認めなかった。病理組織像では明細胞癌であり、腎周囲脂肪組織への浸潤は認められなかった。血清 AFP 値は術後5日目では 600 ng/ml と不変であったが、術後17日目の3月24日には 300 ng/ml と下降した。化学療法として vin-

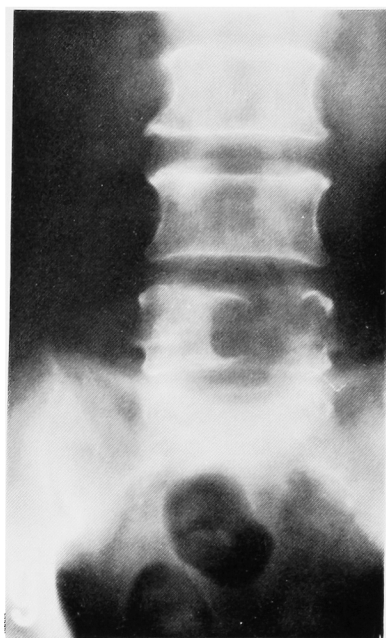


Fig. 1. 腰椎の断層撮影



Fig. 2. 右腎動脈造影

blastine 10 mg および ifosfamide 10 g を3月30日より4月3日までの間に投与し、4月18日 AFP 値はさらに下降し 100 ng/ml となった。手術および化学療法にても腰痛および右肩部痛は軽減することなく、嘔気、食思不振などの副作用がいちじるしかったため、その後の化学療法は不規則に施行されたが、期間中の

AFP 値はほぼ一定で5月7日の値は 150 ng/ml であった。主訴であった上記疼痛の改善をみないため、また患者の希望もあり5月10日退院した。疼痛のため外来通院も思うようにならず、徐々に全身衰弱し7月27日自宅にて死亡した。

考 察

1983年石田ら¹⁾は血清 AFP が 698.9 ng/ml と高値を示した肝臓転移をともなわない腎癌の1例を報告している。その文献的考察において原発性肝癌および胎児性癌以外で血清 AFP 値が 1,000 ng/ml 以上であったのは世界で104例であり、胃癌の82例がもっとも多く、ついで膵臓癌、肺癌、胆嚢癌の順で、さらにこのうち肝転移のないことが証明されたのは19例であったと述べている。石田らの報告では腎組織中の AFP の存在に関する蛍光抗体法はおこなっていないが、病理解剖により腎癌および骨転移巣以外に腫瘍のないことが確認されている。

われわれの症例では消化管造影、病理解剖をおこなっていないため原発性または転移性肝癌および消化器をはじめとした他の部位の癌の可能性については、肝スキャン、CT、血液生化学的検査、手術時の腹腔所見および臨床症状から否定することしかできないが、石田らの腎癌と腎癌の骨転移で AFP 値が上昇したという報告や、われわれの症例で術前の AFP 値が 600 ng/ml であったのが腎摘出後17日目に 300 ng/ml に下降したことを考えると、腎癌により AFP 値が上昇していたことが推測される。しかし第5腰椎の生検では、壊死組織しか得られず、腎癌転移の証明も、また腎組織の蛍光抗体法もおこなっていない腎癌が AFP を産生したという証明もなされていない。

腎臓の AFP を産生する機序に関して、1971年 Koda らは原発性肝癌患者の剖検時に得られた転移や

出血のない腎臓の糸球体細胞および尿管管の上皮細胞に蛍光抗体法で AFP を証明しているが、その理由は不明としている¹⁾。

石田らは腎臓の原発巣を治療する以前に、骨転移巣の切除や放射線照射により AFP 値が正常値まで減少したこと、および腎摘出術をおこなっても AFP 値の下降がみられなかったことから AFP の産生場所が腎臓の原発巣ではなく骨転移巣であろうと述べているが、われわれの症例では腎摘出術により AFP 値が減少し、術後化学療法によりさらに下降したこと、腎癌摘出による転移巣の縮小はまれであることから腎臓の原発巣および骨転移巣の両方から AFP が産生されていたことが考えられるが、これも推測の域を脱しない。

しかし石田らやわれわれの症例を考慮すると腎癌でも AFP 値が上昇する可能性があると思われるので、今後これらの症例において病理解剖、蛍光抗体法などによる腎癌が AFP を産生する証明や、その機序の解析を試みられることがのぞまれる。

結 語

血清 AFP 値が高値を示した骨転移をともなう腎癌の1例を報告した。剖検はおこなっていないが肝スキャン、CT、血液生化学的検査、手術時の腹腔所見、臨床症状からは上記以外の腫瘍を疑わせしめる所見はなく、腎癌および腎癌の骨転移により血清 AFP 値が上昇したと推測された。

文 献

- 1) 石田俊武・奥野宏直・鍵山博士・森下常一・西村典久：血清 alphafetoprotein 値陽性を示した肝臓転移を伴わない腎癌の1例。整形外科 34：313～317, 1983

(1984年1月17日受付)